

東邦大学学術リポジトリ



OPAC

東邦大学メディアセンター

タイトル	土谷一晃教授送別の辞
別タイトル	Farewell Professor Kazuaki Tsuchiya
作成者（著者）	高橋, 寛
公開者	東邦大学医学会
発行日	2019.03.01
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 66(1). p.5 5.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	退任記念
著者版フラグ	publisher
JaLDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.2018 049
メタデータのURL	https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD07846274

土谷一晃教授送別の辞

高橋 寛

東邦大学医学部医学科，整形外科科学講座（大森）教授

平成31年3月31日をもって土谷一晃先生が退任される。土谷一晃先生は昭和53年に本学を卒業後、本学の第一病理学教室で研鑽され、骨軟部腫瘍に興味を持たれ、昭和56年に整形外科科学講座に入局された。入局当初は、骨軟部腫瘍の仕事の思ったようにできずに苦勞をされたようである。ご専門は、もちろん骨軟部腫瘍であるが、スポーツ整形外科にも造詣が深かった。学生時代サッカー部であった事からサッカー選手とも交流があり、コンサドーレ札幌のチームドクターもしておられた。

私が入局したのは昭和63年であったが、当時の教授は茂手木三男先生であり、土谷先生は、茂手木先生のご指導で、スピードスケート選手の検診をされ、臨床研究をしておられた。

入局後、私の最初の指導医が土谷先生であった。私はサッカーが門外漢であったが、よく土谷先生が会話の中でサッカー選手のファーストネームを唐突に言われるため全く会話が成立せず困惑したのを記憶している。

臨床面では、骨軟部腫瘍の患者を多く担当させて頂いたが、良性だけでなく悪性腫瘍の患者も多くいらしたため大変勉強になった。特に良性とは言え、腫瘍と診断された患者の精神状態、悪性腫瘍を患った患者の悩み、苦しみ等を直接経験し、医療者としての態度を勉強することが出来た。先生のご指導で、最初の発表を地方会でさせて頂いたが、今も忘れぬ孤立性骨嚢腫に対するシャント療法についてであった。入局して半年後に大橋病院に出向していたため、大橋から発表原稿を土谷先生に校閲して頂くために大森に通い大変な思いをした。

当時はワープロが出始めの頃であり、ルボ80?というワープロは手に入れたものの、土谷先生は手書きであったため、原稿をコクヨの原稿用紙に書いては赤で×をつけられ、直しては×、また直しては×になり、結局どう直したら合格なのか全く分からなくなった。

発表は、頭が真っ白になりながら何とか終了したものの、茂手木先生から投稿原稿を書くように指示された。土谷先生にご相談すると投稿はしてはいけないと言われるし、茂手木先生は発表だけして投稿しないのは“けしからん”と怒られるし大変困惑した。大橋病院に勤務していたが、月に一回は茂手木先生が外来に来られ、毎回投稿論文の事を聞かれ、進捗していないためこっぴどく怒られた。最終的には、茂手木先生のご指示で投稿したが、論文が掲載されると土谷先生にこっぴどくしかられた。

その後、私は骨軟部腫瘍を専門に選択しなかったため、先生のご指導から外れたが、北川先生がスポーツ整形、井形先生が骨軟部腫瘍で厳しい指導を受けていた。

土谷先生の臨床面ではこの時代、形成外科の丸山教授、沢泉先生らと四肢の軟部腫瘍の広汎切除後、遊離皮弁の手術を良くしておられた。また、骨肉腫の手術、術後の化学療法も良くしておられた。

岡島行一教授、勝呂徹教授の時代には助教授であったが、勝呂教授の人工関節手術に参加され、お二人で創意工夫して膝蓋骨を半裁して膝関節近傍の腫瘍の切除、腫瘍用人工関節などもしておられた。2011年に外傷・スポーツセンターの教授に就任され、勝呂徹教授が退任された後には主任教授となられ、若い医局員の意見を良く聞かれ医局の運営にあたられた。2017年には節目となる第50回の日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会の会長も見事に務められた。

そして2019年、私が入局して以来、一度も大森から離れた事のない先生が退任されるのは何か不思議な感覚を覚える。まだまだ65歳といった年齢は一昔前と比べて非常に若い。ましてや先生は毎日ジョギングされており体力には自信がおりだろう。今後とも大所高所から残った医局員にご指導を頂ければありがたいと思っている。